シリーズ　秘蔵写真

# 今は昔の林業

第42回

中部森林管理局総務課
井上（いのうえ）　日呂登（ひろと）

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

## 「裏木曽」その六

### 大材吊り

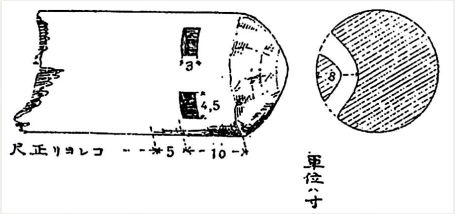
「大材吊り（たいざいつ）」は急な斜面から貴重な大材を下ろす際に、丸太に「目戸穴（めとあな）」と呼ばれる穴を開け、綱を通し、大人数で力を合わせながらゆっくりと下ろしていく方法です。丈夫な麻綱が太い立木や根株に巻き付けられますが、摩擦で火が起こることさえあったそうです。

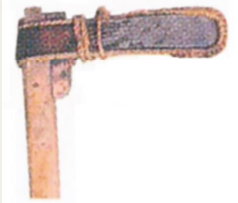
木曽でも大材吊りは行われていたのですが、裏木曽では急な斜面から伐採・搬出をしなければならない機会が多く、人力が頼みの時代には運材にこうした工夫・苦労がありました。ヒノキのみならずケヤキの大材もこの方法で動かされることがありました。

綱を通す「目戸穴」は目戸斧（めどよき）と呼ばれる特殊な細い刃を持つ斧を用いて、材を貫通する穴を掘ります。大材吊りは行われなくなって久しい運材方法ですが、現在でも神宮（伊勢）の式年遷宮関連行事では目戸穴を模した貫通していない象徴的な装飾が彫られることがあります。

「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より大正時代初め頃の大材吊りのイメージ

大正九年、裏木曽からの神宮（伊勢）用材を大材吊りで出材する様子（おそらく現在の東濃森林管理署加子母裏木曽国有林）。



（上図右）大正五年帝室林野管理局発行「木曽御料林之造材運材」より目戸穴の図、（上図左）目戸斧

（下写真）平成十七年の神宮式年遷宮関連行事での御神木（長野県上松町）。目戸穴は実用性のない象徴的な装飾として僅かに彫られている。

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。

これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むか～しの写真を紹介するサイトです。

当サイトへは、コードを読み込んでください。

モノクロ